

小石川

此の分限帳は、永祿のころ改めし也、されどこの大胡といへるは、牛込勝行がこなる今牛込と稱するの大やう、東は小日向、關口、早稻田、中里等に境ひ、南は御堀、及市ヶ谷、船河原町に限り、西は都而市ヶ谷に續き、北は大久保高田に及ぶ、此餘牛込在方分の地、中里村、早稻田村、續に在り。

〔江戸砂子〕三小石川 白山 大塚 集鴨 板橋

小石川と云は、小石の多き小川幾流もあるゆへ也といふわけ、傳通院のうしろの流、ねこまた橋の川筋、小石川の濫觴といふ、又白山權現は、加賀國石川郡よ、勸請あれば、それに對しての名ともいへり。

〔南向茶話〕問曰、小石川は舊名の由、舊記等にも有之候哉。

答曰、小石川之名目、舊記にも見當り不申候、宗祇の廻國記は、名にしあふ小石川を渡ると云々、然ども回國記は、實書ならぬ様に被存候、宗祇にて無之やうは、沙汰有之候、其外は所見なし、總名とする地廣く候、南は小石川御門堀通りより、北は大塚の大道迄は、小石川と號す、牛込邊も、上水之通、牛天神下迄は、小石川之内也、此所今、金杉と稱する町や、あり、舊名此邊、金曾木村といふ所にて、古河公方の家臣、豊前山城守と申仁居住の所なる由、其家傳にあり、宅地の所は、今の、新坂俗に今井坂と、其上なるよし申傳ふ、金剛寺坂の下は、舊名小石川、鷹匠町を呼し所也、明曆年中出火は、此所より起れりと承候。

〔御府内備考小石川〕江戸志に、此地は小石の多き小川幾流もある故、小石川と名付しといふ、こは最古世の話なるにや、詳なる事を聞ず、正保改の武藏國圖には、今の御藥園の西なる田間より、傳通院後の方へ達する流と覺し、川を、小石川と注したり、則江戸砂子に、傳通院の後の流れ、猫また橋の川筋を、小石川の濫觴と書しもの是なり、今は小石川と唱ふる地、最廣し、南は小石川御門外なる御堀に限り、北は集鴨に至り、東は本郷駒込に添ひ、西は小日向に隣り、乾の方は雜司ヶ谷